



TITLE:

元代江南の豪民朱清・張瑄について : その誅殺と財産官没をめぐる

AUTHOR(S):

植松, 正

CITATION:

植松, 正. 元代江南の豪民朱清・張瑄について : その誅殺と財産官没をめぐる. 東洋史研究 1968, 27(3): 292-317

ISSUE DATE:

1968-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152775>

RIGHT:

元代江南の豪民朱清・張瑄について

——その誅殺と財産官沒をめぐる——

植 松 正

はじめに

朱清と張瑄は、南宋末無頼の海賊または鹽賊から身を起こし、元朝の對南宋戰に協力し、以後海運事業をほとんど一手に獨占していた人物である。彼らに關する傳記はその海運の功を記し、從來先學諸氏によつて元代の海運史上において彼らはたした役割はほぼ明らかにされており、しかも彼らがおそらく無實の罪によつて誅せられたことも知らされている。^①藤野彪氏はその論文「朱清・張瑄について」の中で、彼らが海運事業だけでなく江南に大きな勢力を有していたことを指摘された。ここに私が再び朱清・張瑄をとりあげたのは、いまし氏の指摘を具體的に示しながら、かつその誅殺に至る事情を當時の政治情勢の中でとらえてみたいと思つたからである。順序としてまず朱清・張瑄が誅殺されるまでの過程を政治史的に述べ、次に彼らの有した實力についていくつかの方面から検討し、そして彼らの誅殺と財産官沒のもつ意義に及ぼうと思う。

一 朱清・張瑄誅殺の政治的背景

『元史』は彼らの列傳を立てていないが、このことは彼らの歴史的人物としての重要性を滅殺するものではない。その出自の卑賤と元朝の江南地方に對する政策への協力について、後人（特に明人）の忌避するところがあつたためであらう。^⑧ 彼らの傳記は藤野氏もふれているのでここでは詳述を避けるが、要するに彼らは元朝の招撫をうけた南人で、その海軍力によってあるいは宋室の典籍帑藏を海路北方へ輸送し、あるいは日本など外國遠征に従い、至元十九年〔1282〕に海運が開かれてよりのち次第に實力を蓄えてきたものである。ここでは桑哥專權の時代から考察をはじめ。

桑哥が中央の尙書省にあって政權を専らにした時期は至元二十四年から二十八年にわたり、この時政府は北邊情勢と財政の兩面の危機に直面していた。海都の亂と紙幣インフレ傾向の難題がそれであつた。『元史』本紀には至元二十五・二十六兩年につごう五回の海都の侵寇を記している。^⑨ このため多額の軍事費と兵糧を準備しなければならなかつたし、日本遠征や安南遠征にも少なからぬ出費を行なつていたであらうからその補填も行なう必要があつた。收税體制の強化、鈔法改革そして江南米輸送體制の整備なども當面の緊急事態に對處するためであつたかと思われる。朱清と張瑄は宣慰使に任ぜられたが、それまで海運を獨占的にまかされてきた兩人の權限は抑制された。すなわちそれぞれ海道運糧萬戶としてその衝にあたつていたが、至元二十四年にあらたに二萬戶府を増設し、彼らの經營した二萬戶府とあわせて四萬戶府とした。そしてこれもあらたに設置された行泉府司がこれら四萬戶府を統轄し、海運體制を強化したのである。至元二十五年十月あたかも海都の侵寇が報ぜられるおりに、桑哥は次年輸送の江南米を一舉に倍增して百萬石にすべきことを請うており、實際この目標はほぼ達成された。また同年三月、後述する松江の曹夢炎なるものが米萬石とひきかえに徭役免除と官職を乞うたところ、桑哥はこれをゆるし彼を浙東道宣慰副使に推している（『元史』卷一五世祖紀）。このように桑哥は江南の土着勢力をコントロールしつつ政治經濟上の危機をきりぬけようとした。やがて海都の勢力は一旦後退し、北邊情勢は一時的な休息状態に入り、^⑩ 至元二十八年、桑哥とその黨與は失脚した。朱・張兩氏は早速行泉府司の廢止を要請し、その結果もとどおり彼らの經營する二萬戶府が設置された。このことによつても彼らと尙書省のうちだす政策がその利害にお

いて一致しなかつたことがわかる。^⑤

至元二十九年、張瑄は江浙行省參知政事、その子の張文虎は湖廣行省參知政事と行省の宰相に名を列ねるようになる。やがて彼らに對する反感が表面化してくる。その例を次にあげよう。

至元末、儉人姚衍、誣二氏瀕海異志。上不聽、詔丞相完澤曰、朱張有大勳勞、朕寄股肱、卿其卒保護之。〔梧溪集〕卷四下〈張孝子序〉)

有飛書妄言朱清・張瑄有異圖者、詔中外慰勉之。〔元史〕卷一八成宗紀元貞元年正月甲戌)。

これらの記事が示すように、世祖の末年から成宗の初年にかけて彼らに對する誹謗の聲がおこつたが、おそらく完澤の盡力によつていずれもおさえられた。『元史』卷一九成宗紀元貞二年六月丙寅の條の

詔行省行臺、凡朱清有所陳列、毋輒止之。

の記事は彼らの地位の安泰を示すものである。この年朱清は河南行省參知政事に、張瑄は江西行省參知政事に任じ、のちには朱清は河南行省左丞、張瑄は江浙行省左丞、張文虎は江浙行省參知政事に進んだ。『大元海運記』卷上に、

(大德)六年、以海道運糧萬戶府官員、本府自行舉保。從張文彪言也。江浙等處行中書省參知政事張文彪會驗、卑職父子、於至元十九年以來、欽依世祖皇帝聖旨、創開海道、漕運糧斛、今將二十餘年。先行泉州府司所設衙門四處、運糧萬戶三十五員・千戶百戶五百餘員、至甚冗濫、卑職於二十八年、親赴都省、陳說減併止設都漕運萬戶府二員。……所有頭目、依奉都臺定例、從卑職父子、驗數舉保諸知海道萬戶五員・鎮撫二員・千戶百戶各三十三員・首領官四員、押運糧斛。近年以來、本府所運、多不過三十五萬石、元設官員、其實太冗、虛受俸祿、……以此卑職參詳、既是每年額運糧米數少、擬合除減本府止設達魯花赤一員・正副萬戶四員・首領官二員、……

とあつて、大德六年〔1302〕に至つて海道運糧萬戶府の人事權もはぼ朱・張兩氏の手中に入つた。これは世祖以來の海運における自らの實績をひいて運糧萬戶の人員整理を願う張文虎の上言にしたがつた結果であつた。ただしこの決定はそれ

ほど簡単に下されたとは思えない。『大元海運記』に、つづいて

又據江西等處行中書省參知政事張瑄呈、……近年以來、所運糧斛、本府與朱萬戶停半分運、多不過三十五萬石、元設官員、實爲太冗、……呈都省定奪聞奏、未奉明降。卑職參詳、運糧人員、起自卑職與朱參政創行海道、由此都省從准所舉、久而爲例。……今男張文彪（ハチウ）所保官員、的係諳知海道及自幼根逐父祖下海精練風水熟諳公務之人。卑職衰老坐疾、不任輔政、卻緣初行海道、創始艱難、不易成就、安忍坐視其廢、即日（目）已是春暮、裝糧時分在邇、若不蒙早賜定奪、誠致失誤。今歲糧儲將來、漸至敗壞、爲此今重將已保員數職名、開坐於後保結。具呈照詳。

というように、張瑄も強力な援護をおしなかった。老境に入った張瑄はその子に自らの權力を繼承させるために並々ならぬ工作をしたのであろう。しかしその決定が遅延する當然の理由があったのである。『元史』卷二〇成宗紀大德六年正月丙午の條に、

中書省臣以朱清・張瑄屢致人言、乞罷其職、徙其諸子官江南者于京。
とあり、また同月庚戌の條に、

江南僧石祖進告朱清・張瑄不法十事、命御史臺詰問之。

とあるように、この年の正月すでに彼らの地位は危くなりつつあった。とすれば海道運糧萬戸府の人事權を認めたということもあるいは一時的なジュエスチャーにすぎなかったのかもしれない。そして『元史』卷二一成宗紀大德七年〔1303〕正月乙卯の條に次のようにある。

命御史臺・宗正府、委官遣發朱清・張瑄妻子、來京師、仍封籍其家實、拘收其軍器海舶等。

こうして彼らの破局は決定的となり、朱清は獄死し、その子の朱虎・張瑄・その子の張文彪はいずれも殺され、一族は捕えられた。その財産沒收の詮議は厳しく行なわれ、『元史』卷二一成宗紀大德八年五月辛酉の條に、

以所籍朱清・張瑄江南財產、隸中政院。

とあるように、彼らの財産は皇后の府である中政院に沒收された。彼らは籍沒の強行の前に實にあつてなく何らの武力抵抗を試みることもなく敗れた。『元史』卷一五六董士選傳に、

(董士選) 以中書左丞、與平章政事徹里、往鎮浙西、聽辟舉僚屬、至部察病民事、悉以帝意除之。民大悅。有聚斂之臣。爲奸利、事發得罪、且死。詐言、所遣船舶、海外未至、請留以待之。士選曰、海商至則捕錄之、不至則無如之何、不係斯人之存亡也。苟此人幸存、則無以謝天下。遂竟其罪。

とあり、ここにいう「聚斂之臣」が朱清・張瑄のいづれかと思われるが、海商の歸還を待つ猶豫も許されず、ただちに大都に護送された。彼らが本來元朝國家權力との合意によつてのみその繁榮を維持できるといふ體質をもっていたがために、彼らにかけられる壓力に對抗する手段としては賄賂しかもちえなかつたのであらうか。それにしても彼らは來るべき大政變を豫見できなかったという點で見通しを誤つたといえよう。

さてこの事件は朱・張兩氏にとって災難であつたばかりではなく、大都の政府や南中國の政界に大きな波紋を投じた。

『元史』卷一一二宰相年表を一見すれば、大德六年から翌七年にかけて右丞相以下參知政事に至るまで宰相がほとんど交替していることに氣づくであらう。右丞相完澤以下の體制が哈刺哈孫以下の體制に一新されている。『元史』卷二二成宗紀大德七年二月庚辰の條に、

監察御史杜肯構等、言太傅右丞相完澤受朱清・張瑄賄賂事。不報。

とあり、また同年三月乙未の條に、

中書平章伯顔・梁德珪・段真(貞)・阿里渾撒里・右丞八都馬辛・左丞月古不花・參政迷而火者・張斯立等、受朱清・張瑄賄賂。治罪有差。詔皆罷之。

とあるように、朱清・張瑄の賄賂を受けた中央の宰相がずらりと名を列ね、これが人事交替の直接の名目をなした。なお梁德珪・段貞はそれぞれ表に見える梁暗都剌・段那海のことである。完澤については監察御史の糾弾は直接にはうけいれ

られなかったものの、かつて朱・張二氏を保護し、また失敗した雲南八百媳婦遠征（大徳四・五年）の最高責任者でもある彼は當然辭任すべきであった。朱清・張瑄が捕えられる前後に多くの賄賂が諸方にとどけられたであろうし、彼らの存立を危くするような反感の聲を和らげるためにもはやくから贈收賄が行なわれたであろう。ついでに一言すれば、この朱・張をめぐる贈收賄事件がきっかけとなって、大徳七年それまでの「十三等例」にかわって「十二章法」という贓罪の條例が定められた。^⑧ 新人事では、知樞密院事の阿忽台が左丞相として登場し、木八剌沙（平章政事行上都留守）・阿瓦老丁（陝西行省平章政事）・尙文（江南行臺御史大夫）・董士珍（江浙行省參知政事）ら地方にでていた人々が中央にひきあげられた。『元文類』卷六八の尙文の神道碑に、

時朱張氏得罪、省臣率譴逐、惟左丞相・兩新平章・洎公凡四人、調變政務。

とあるように、阿忽台・阿老瓦丁・木八剌沙・尙文の四人がはじめ政府の中樞をにぎった。

地方においても人事の交替が行なわれた。『金華黃先生文集』卷二五の劉國傑の神道碑に、大徳七年のこととして、

時方遷除天下行省官、獨公依前湖廣行省平章政事。

とあり、また『新元史』卷三二行省宰相年表を見れば、その異動を知ることができる。なかでも、大徳七年江浙行省に赴任した左丞董士選（前御史中丞）と平章政事徹里（前江南行臺御史大夫）とは直接朱・張の事件の事後處理にあたったとみられる。『元史』卷二一成宗紀大徳七年閏五月癸未の條に、

命江浙行省右（左）丞董士選、發所籍朱清・張瑄貨財、赴京師。其海外未還商舶、至則依例籍沒。

とあり、董士選は朱・張の財産の大都への輸送にあたった。また阿忽台と同じ燕只吉台氏の徹里の監督した水利事業について後にはふれる。總じてこれら新人事によって擡頭したものは桑哥失脚後の完澤を中心とする體制・政策に批判的な人であった。

このように大きな波紋をよびおこしたが、朱・張をめぐる問題そのものがこの人事の本質なのだろうか。またはたして

藤野氏の言われるように「成宗には世祖ほどの氣力もなく蒙古人の漢人をいむ精神と相まって兩氏を滅したものだ」ろうか。さらに政治的背景を追ってみよう。先に引用した『梧溪集』卷四下〈張孝子序〉に、つづいて

成宗嗣位、未幾疾、后專政。樞密斷事官曹拾得、以隙踵前誣、后信輒收之。丞相完澤奉先帝遺詔諍莫解。參政（張瑄）竟獄死、籍其家、沒入諸子女、或竄之漠北。

とあるように、朱・張二氏を保護せよとの世祖の遺詔を奉ずる完澤の意見は皇后にかえりみられることなく、彼らの誅殺が行なわれた。完澤はかつて皇太子眞金（裕宗、成宗の父）の僚屬であり、眞金死し成宗即位の後、成宗の母の徽仁裕聖皇后（オンギラト氏）の力を背景に世祖の舊臣としての地位を保っていたと思われる。ところが、大德三年に貞慈靜懿皇后（オンギラト氏、成宗との間に一子德壽をもうく）が死し、大德四年に徽仁裕聖皇后が死んでのち、發言力を強めてくるのが、成宗の皇后ト魯罕（大德三年貞慈靜懿皇后にかわって册立）である。大德四年皇后關係の官廳の中御府は中政院と改稱され、品秩は二品に陞っている。元朝歴代皇后のうち數少ないバヤウツト氏出身のト魯罕皇后が對立する相手はオンギラト氏を母にもち成宗の甥にあたる海山（武宗）と愛育黎拔力八達（仁宗）であった。當時海山は北邊にあつて海都の亂の鎮定にあたっていた。海都の入寇についてはさきにも一言したが、海都は大德五年〔1301〕八月戦死し、そのあとを察八兒がうけたが、實權は都哇の手にあつた。『元史』卷二成宗紀大德七年七月丁丑の條に、

都哇・察八而・滅里鐵木而等、遣使請息兵。帝命安西王、慎飭軍士、安置驛傳、以俟其來。

とあり、ここに懸案の蒙古地方の紛争は解決をみた。海都の亂終息のめどがつき、あるいは解決した時點において、それまで外蒙にむけられていた海山の勢力は、たとえ具體的な軍事力行使をとまなわずとも、皇后の勢力下にある大都政府にとってかなりの脅威となったにちがいない。またのちに皇后と重要な關係をもつにいたる安西王阿難荅に命じて海都の亂の事後處理にあたせたということは、大德七年六月庚子「阿（暗）伯・阿忽台らに命じ河西の軍事を整飭せしめた」という『元史』本紀の記事と同様、その警戒の對象が那邊にあつたかを想像させる。『元史』卷一三六哈剌哈孫傳に次のよ

うにある。

（大德）七年、進中書右丞相。……每歲車駕幸上都、哈刺哈孫必留守京師。時帝弗豫、制出中宮、羣邪黨附。哈刺哈孫以身匡之、天下晏然。

これによれば、哈刺哈孫は孤軍奮鬪、皇后派官僚に對抗しているかのごとくである。以後しばらくは哈刺哈孫と阿忽台が政府の二大巨頭であった。大德九年六月皇子德壽を皇太子に立てたときには、ト魯罕皇后は皇帝の位を順宗系にゆずりわたすことなく次代皇帝の太后として實權をふるうことを約束されたのであろうが、あいにく同年十二月に德壽は死んでしまった。形勢に不安を感じた皇后は翌十年順宗の妃の昭獻元聖皇后（オンギラート氏、武宗・仁宗の母）を愛育黎拔力八達とともに懷州においやった。當然大德十一年の成宗の死は深刻な帝位繼承争いをひきおこすことをまぬがれなかった。

『元史』卷一一四ト魯罕皇后の傳に、

大德十年、后嘗謀貶順宗妃荅吉、與其子仁宗、往懷州。明年、成宗崩。時武宗在北邊、恐其歸必報前怨、后乃命取安西王阿難荅失里、來京師、謀立之。

とあるように、皇后は海山と愛育黎拔力八達をしりぞけ、別系の世祖の孫にあたる安西王阿難荅を立てようとした。『元史』卷二二武宗紀のはじめに、

左丞相阿忽台・平章八都馬辛・前中書平章伯顔・中政院使怯烈・道興等、潛謀推成宗皇后伯要眞氏稱制、阿難荅輔之。

とあり、中政院使はいうまでもなく、阿忽台・八都馬辛・伯顔らの皇后派官僚が皇后の攝政體制を策したことがしられる。このとき哈刺哈孫にみちびかれて海山と愛育黎拔力八達は大都に入り、即位の準備をすすめるト魯罕皇后・阿難荅・諸王の明里帖木兒（阿里不哥の子、一時察八兒の軍に投ず）及び阿忽台らは捕えられ、海山が皇帝の位についた。

このようにみてみると、朱清・張瑄の誅殺は單に成宗の狹量に歸することはできず、中央の政治の舞臺との關連において

とらえるならば皇后の存在こそ注目されねばならない。北方において形勢のわるい皇后としては、南方に地歩を固めるのが最も有効な方策と考えるであろう。ここからその財産を全て皇后の府の中政院に没収するような仕方では朱清・張瑄のとりつづしが強行されたのであらう。

二 朱清・張瑄の實權と經濟的實力

前節では朱清・張瑄の誅殺の政治的背景をさぐってきた。しかしこれは皇后とその側近のものたちの恣意によってひきおこされただけのものとは思えない。彼らを滅ぼしたことがどれほどの重みをもって理解されるべきなのか、朱・張兩氏の實力の内容にたちいたって検討する必要がある。その海運における實力は諸家のすでにふれるところであるので贅言をさけるが、大徳六年十月、婺州路に治した浙東宣慰司を改めて、浙東宣慰司都元帥府となし海濱の慶元路に治し、朱・張なきあとの海道管理にあたらしめた。翌七年には朱・張兩氏の管理した海道運糧萬戶府は海道都漕運萬戶府に一本化された。注目すべきは大徳六年以後大都への歲運糧額は飛躍的に増加して百萬石を越え、至大二年には二百萬石を、延祐末には三百萬石を突破する。中央政府の力が直接及ぶようになって、朱・張兩氏による古い運糧體制が改められ、江南税糧の輸送力が強化されたのであらうが、このことは逆に彼らの占めていた利益の膨大さを推測させる。江南米の輸送權を直接掌握したことは元朝政府にとって大きな意味を有したし、江南の中國人民にとってはおそらくさらにその負擔は増大したと考えられる。藤野氏は朱清・張瑄が海運事業の他に、高利貸を營み、所有の田地を擴大し、海外貿易を行ない、私鹽を鬻ぎ、交鈔を發行したことを述べておられる。以下氏の所説を少しく補おうと思う。

『弘治太倉州志』卷一沿革に、

至元十九年宣慰朱清・張瑄、自崇明徙居太倉、創開海道漕運、而海外諸番、因得於此交通市易、是以四關居民、閭閻相接、糧艘海舶蠻商夷賈、輻湊而雲集。當時謂之六國馬頭。

とあり、彼らが活動してから太倉（崑山縣）は六國馬頭と稱されるほど海外貿易の據點の一つとして繁盛した。先に述べたように、董士選が朱・張を逮捕するに際し、彼らが海商の歸還までの猶豫を乞うたこと、また「その海外の未だ還らざる商舶は、至らば即ち例に依りて籍沒」する決定が下されたことによつても、彼らがみずから海外貿易によつて巨利を博していたであろうことがわかる。『元史』卷九四食貨志市舶に、

（大德）二年、併激浦上海、入慶元市舶提舉司、直隸中書省。是年、又置制用院。七年、以禁商下海罷之。

とあるうち、大德七年の海禁は朱・張籍沒事件に對應するものであらう。七年に廢された制用院は大德九年八月に至つて復活されている（『元史』卷二一成宗紀）。制用院はその職掌内容は明らかでないが、帝室に入るべき海外の寶貨を管理する役所であらうか。民間の海外貿易を禁止し、貿易の利を中央政府の手に收める意圖があつたのかもしれない。

私鹽を鬻いでいた朱清・張瑄が元朝に投降したのちも私鹽に關係してゐたことは十分にありうることであらう。ただ彼らは同時に行省の官僚として私鹽をとりしまるべき立場にある。『元典章』二二戸部卷八の新降鹽法事理の條に、朱清が大德四年の鹽法の成立にあづかつてゐることがみえる。私鹽を鬻いでいたことが確實であるとすれば、ますます彼らの政治力の大きさを示すものであらう。

彼らが紙幣を發行してゐたとの説をうらづけるものは、『草木子』卷三下にみえる次の記事である。

元海運自朱清・張瑄始、歲運江淮米三百餘萬石、以給元京。……朝廷以二人之功、立海運萬戶府、以官之、賜鈔印、聽其自印、鈔色比官造加黑、印硃加紅。富既埒國、慮其爲變、以法誅之。

これをめぐつて、穗積文雄氏・藤野氏は朱・張兩氏の私鈔が公認されたとし、前田直典氏はこの話は事實ではあるまいとし、岩村忍氏は「運糧の必要上、楮幣の發行・操作の權を委任されたと考えるべきであらう」とする。この記事は『新元史』『續文獻通考』に採録され、『堅瓠六集』卷二朱張兩海運の條にも「詔賜印令自造用」とみえる。その由來するところ、が『草木子』だけであるにせよ、彼らが私鈔ではなく、紙幣發行に關して何ほどの權限を有してゐたとみるべきでは

なからうか。

朱・張兩氏の實權の大きさを示す例として江南の行樞密院の廢止問題がある。行樞密院はもとより特定の地域の軍事を中心とする政務を擔當するために設けられた樞密院の祖先機關である。『元史』卷八六百官志によれば、至元十九年以後江南に設けられたものとしては、揚州行院・岳州行院・沿江行院・江西行院・江淮行院の名がみえる。ところが成宗即位の至元三十一年〔1294〕に行樞密院は廢止され、翌元貞元年には行樞密院管下の軍隊を行中書省の長官に虎符を與えて統率させることになった（『元史』卷一八成宗紀元貞元年正月乙丑の條）。なにゆえ行院は廢止されたのであろうか。『元史』卷一二七伯顔傳に、

江南三省累請罷行樞密院。成宗問于伯顔、時已屬疾、張目對曰、內而省院各置爲宜、外而軍民分隸不便。成宗是之、三院遂罷。

とあり、江浙・江西・湖廣の江南三省が行院の廢止を熱望し、老臣伯顔も江南に關しては行省と行院の併置に反對したのである。伯顔は海運を提議した人物であつた。當然このうらに朱・張らの勢力が存在した。『元史』卷一七五張瑄傳に、

（至元）二十九年、入朝。時朝廷言者、謂天下事定、行樞密院可罷。江浙行省參知政事張瑄領海道、亦以爲言。樞密副使暗伯問於瑄。瑄曰、見上當自言之。召對瑄曰、縱使行院可罷、亦非瑄所宜言。遂得不罷。……拜鎮國上將軍江淮

行樞密副使。成宗即位、行院罷。

とあるように、張瑄は世祖のときから行院の廢止を唱えており、彼が行院の存續をいとうべき理由がたしかにあったこと、張瑄が張瑄に對して反感をもっていたことが認められる。前述の世祖末年から成宗初年にかけての朱・張兩氏への反感もおそらくはこの問題と深くかわるものと思われる。張瑄は江淮行樞密副使からのち浙西肅政廉訪使に遷り、地方行政の監察にあたり官吏の不正の摘發などを行なったが、大德六年に南人の林都鄰なるものにその不正を告發される事件を経て、樞密院の職にもどつた。また『元朝名臣事略』卷四（哈刺哈孫）に、

壬辰（至元二十九年）、置行樞密院、兵民政分、勢不相營、奸寇伺發、溪洞以闕。王（哈刺哈孫）入覲、列其不便、罷之。

とあつて、當時湖廣行省平章政事であつた哈刺哈孫も行院の存續には反對したのであつた。

三 大土地所有者としての朱清・張瑄

彼らは多大の田土を所有し擴大していった。まずその地域的な廣まりをみてみよう。『至正金陵新志』卷六官守志に次のようにある。

建康等處財賦提舉司、隸中政院下江浙都總管府、五品衙門、……至大二年十一月、於溧陽州設立、管頭建康路錄事司・溧陽州、常州路宜興州・無錫州・晉陵・武進縣、鎮江路金壇縣、揚州路錄事司・眞州揚子縣・通州靜海縣・崇明州・太平路繁昌縣、寧國路南陵縣、徽州路祁門縣、淮安路清河縣總計八路一十五州司縣斷沒朱張錢糧。

籍沒した朱・張の財産は中政院の管理に委ねられたが、ここにいう建康等處財賦提舉司は、武宗のとき朱・張の田土財産を管理するためにおかれた、中政院管下の江浙等處財賦都總管府提舉司に所屬する役所である。朱・張兩氏の田土の所在地はこのように廣範圍にわたり、揚子江や運河沿いの地域ばかりでなく、寧國路・徽州路といった地方にまで及んでいる。その州縣ごとに實際にどれほどの田土を有したかはあまり明らかでない。ただ『萬曆鎮江府志』卷五賦役志田賦に、元代の統計として、

田地山蕩池塘雜產總數實計 三萬六千六百一十一頃二十七畝九分有奇

有司所管 三萬二千四百九十四頃九十七畝五分有奇

江淮財賦府所管 四千一百四頃一十八畝有奇

江浙財賦府所管 一十二頃一十二畝四分有奇

とあるように、江浙財賦府の管理するものは有司・江淮財賦府所管のものにくらべ極めて少ない。『至正金陵新志』にいう鎮江路の金壇一縣において有した朱・張兩氏の田土の實態はかくのごとく少なかった。この鎮江路の實態をもつてただちに他の路分の場合にあてはめるは早計であろうが、たとえそれが有司の管轄するところとくらべて少なかったとしても、廣大な地域に彼らの田土が散在していたこと自體は注目すべき事實である。

さらに彼らは平江路・松江府・嘉興路・杭州路にも田土財産を有していたと思われる。「田園第宅、吳下に通し」(『正德松江府志』卷三二遺事)と稱されるゆえんであるが、いま松江府の場合をとりあげてみたい。『正德松江府志』卷六田賦上に引く後至元五年〔339〕の〈江浙行省所委檢校官王良議免增科田糧案〉に次のようにある。

參詳、松江府原係華亭一縣、自至元二十九年、割東廿五鄉、爲上海縣、四至八到、僅及五百餘里。以志書考之、凶宋紹熙年間、止該秋苗秬米一十一萬二千三百一十餘石。至宋末年、賈似道以官誥度牒、派買公田、增糧一十五萬八千二百餘石、租額太重、民不能堪。及考縣宰楊瑾所記宋末官民田土、稅糧共該四十二萬二千八百餘石、乃宋之文思院斛。至元二十四年括勘該四十五萬八千九百三十三石有奇、比之凶宋舊額、增糧三萬六千一百一十一石。大德七年斷沒朱清・張瑄田土、秋夏二稅共該糧十餘萬石、官田私租糧額亦重。延祐元年元科秋糧夏稅六十五萬三千九百餘石、延祐二年經理自實秋夏稅糧七十四萬五千餘石、比之延祐元年秋夏稅糧、又增九萬一千一百餘石。以一縣之民、分爲兩縣、以一縣之官民田土、加以凶宋公田重額之租。至歸附後括勘經理及斷沒朱張田糧、比之凶宋、又增一倍。地力既竭、民亦重困。……

少々引用が長くなったが、王良のいうところによれば、松江府では南宋末賈似道が大規模な公田擴大を行なつてより以來、元代至元二十四年に括勘として田土の評價算定を行ない、大德七年に朱清・張瑄の田土を沒官し、延祐二年に經理として再び田土の評價算定を行なった。その間稅糧は増加の一途をたどり、佃戸は賈似道時代の高額の小作料のうえに、元代に施行された土地政策によつてもますます小作料をつりあげられその負擔に苦しんでいるというのである。大德七年に籍沒

された朱清と張瑄の所有の田土は税糧十餘萬石に相當するという。これは正糧たる米と豆麥などの雜糧を含むものであるが、彼らが松江府に有した田土はかなり廣大なものであったことがわかる。ただここで問題となるのは、その十餘萬石という税糧についていかに理解するかである。同じく『正徳松江府志』卷六田賦上に記すところをみると、王良が記した各年次の税糧額の他に大徳年間の統計がのせられている。すなわち、

大徳中 夏税 絲六百一十二斤六兩九錢四分

綿一百八十斤一兩一錢五分

秋税 糧一十九萬九千七百五十五石一斗九升六合

鈔三百七十六定二錢六分

實徵夏秋二税 絲五百九十二斤三兩八錢四分

綿一百六十九斤六兩一錢四分

糧一十五萬四千一十五石九斗五升六合

鈔三百六十五定八兩三錢七分

とあるが、「大徳中」というのははたして籍没の前か後かいずれであろうか。秋糧の豫定額約二十萬石・實徵額約十五萬石は常年の松江一府の税糧としては少ない。「大徳中」の年次を決定するきめては今ないが、もし籍没以前の額とすれば水災などのため免糧が行なわれたためであろうし、以後の額とすればそれに加えて朱・張兩氏の税糧が別の所管となったこともその一因と考えられる。別の所管とは朱・張の財が中政院の管轄に委ねられたということである。同志同卷に編者の願清は次のようにいう。

按是時苗稅公田外、復有江淮財賦都總管府、領故宋后妃田、以供太后、江浙財賦府、領籍沒朱張田、以供中宮、稻田提領所、領籍沒朱（國珍）・管（明）田、以賜丞相脫脫、撥賜莊、領宋親王及新籍明慶・妙行二寺等田、以賜影堂寺院

諸王近臣、又有起科白雲宗僧人田糧、皆不係府縣元額、其數莫考。

これによれば、明らかに籍沒された朱清・張瑄の田産は有司の管轄に入らないようである。ところが『正徳松江府志』の延祐元年の税糧額の下に「先是大徳中、没入朱清・張瑄田土」と注文が附されているのをみれば、その年の統計には彼らの田土の税糧が含まれているようでもある。これにつき『光緒重修華亭縣志』卷八田賦下には、『正徳松江府志』の前文をうけて、

案財賦府等所領之田、似皆在縣徵苗稅之外、然大徳中以没入朱清・張瑄田而増糧、顧氏載之、似又在縣徵之内。其詳今不可考。

とあつて、彼らの田糧が有司の所管に歸したのか、中政院下の江浙財賦府に歸して有司の所管と無關係であるのかは明らかにできないとしている。江浙財賦府が朱・張の籍沒財産を管理するようになるのは武宗の至大元年〔1308〕であつて、『萬曆鎮江府志』に有司所管・江淮財賦府所管・江浙財賦府所管と分け、しかもそれらを合計した數字を示しているのはよく整理された統計であるといえる。しかし松江府の場合には、王良の議案に、

以天曆二年至至元四年十月所收稅石較之、除兩財賦外、本府實該計撥糧四十二萬九千餘石。

とあるように、江淮財賦府と江浙財賦府の税糧を有司所管分よりはずしている。少なくともその籍沒よりずっと後にはこうであつた。大徳七年から十一年初めまでの中政院の管轄の實態を明らかにできないのは残念であるが、籍沒された田土が税糧十餘萬石にあたると評價されていることは、これを籍沒前の至元年間あるいは籍沒後の年の統計と比較しても相當廣大な田土を朱清・張瑄が松江府に有していたことを示している。さらにもし「大徳中」の統計と直接比較することが可能であるとするならば、その田土はなお一層大きな部分を占めていたと考えねばなるまい。宋末賈似道が行なつた公田政策の瓦解とともに、戦亂に乗じて無賴の朱清・張瑄がその田土を侵占し、また避役を願う農民の投獻をうけてこのような大土地所有者となつたのであらう。しかも一般に知られているように浙西地方の重税問題はこの籍沒がひとつの原因とな

ったのであった。その所有の形態・經營の實態は今は論ぜず別に課題としなければならない。

先にふれた大徳七年の人事であらたに江浙行省平章政事に任じた徹里は浙西の水利事業を推進した。『元朝名臣事略』卷四「徹里」に次のようにある。

（大徳）七年、改浙省平章政事。其治如臺、門無私謁、以轉粟京師、多資東南、居天下什六七、而松江填淤歲久、富民利之、當水出塗、築爲圍田、以故瀾漫浸灌、沮洳廣遠、民不可稻。公發卒數萬浚決、鍵石堤之、導水入海、使復其故。凡身董役、經時而成、民得良田若干萬頃、至今賴之。

また『元史』卷一三〇徹里傳にも同様の記事がみえ、吳松江の淤塞に乗じて富豪の民が圍田を開發し、このため水災がひきおこされており、徹里の水利事業はこの圍田の害に對處するものであったことがわかる。また『元史』卷一五六董士選傳によれば、董士選は朱・張の財を京師に運搬してから徹里とともに水利事業にたずさわった。池田靜夫氏は『江南文化開發史』（一九四四）において澱山湖周邊の水脈の變遷を論じ、宋時の青龍江にかわって元代には澱山湖の北口より出る吳松江が海に注ぎ、至元二十四年に朱清がその下流域の淤塞のために劉家港を大いに開き、そのため太倉が海港として脚光をあびるに至る事情を詳しく論じている。朱清・張瑄の勢力が拂拭された直後にこの水利事業がおこされたことは、彼らの利益を無視してはじめてなした事業であることを想像させる。後述するように澱山湖の圍田の所有者としては曹夢炎が有名であるが、朱清・張瑄とても劉家港をひらいてからその水利を利用して自らの田産を増やし、かつ太倉における貿易の利を占めていたと考えられる。徹里が行なった水利事業は任仁發の力によるところが大であった。『元朝名臣事略』には前掲の記事につづき「吳松江記」をひいて次のようにいう。

歲甲辰（大徳八年）前海運千夫長任仁發、以吳松江故道墮塞、使震澤之水失其就下性、爲浙西居民害、垂二十年、慨然上疏、條其利病疏導之法。中書省以聞、特命平章徹里公董其役。……始於大徳八年冬十一月望前二日、西自上海縣界吳松舊江、東抵嘉定石橋、供迤邐入海、長三十八里一百八十一步三尺、深一丈五尺、闊二十五丈、役夫爲數一萬五

千、爲工一百六十五萬一千六百七十有奇、至九年二月晦畢工。復置閘竇、啓閉以時、物無疵癘、民無天閼、而事竟集。

つまり劉家港を開いてから通じなくなっていた吳松江の下流の故道を再開したものらしい。このときには朱・張の田土の利や太倉の海港としての利には目をつぶってもよかったのである。

ここで松江府において大土地所有者として名をはせた數人の人物に注目しよう。まず澱山湖に據った曹夢炎であるが、『農田餘話』卷上に、

曹宜慰、其父知縣、前宋福王府管莊田人也。至宣慰日益盛大。時澱山湖爲潮沙漂^⑦塞、大半曹氏占爲湖田、九十三圍、凡數萬畝。相傳其倉中米圍、凡十二行、每行百二十枚、又一所少差、亦十二行、行八十四枚、積粟百萬、豪橫甲一方、郡邑官又爲之驅使。

とあり、曹夢炎が元代圍田の開發によって急速に勢力を伸張してきた。^⑧ 澱山湖の圍田の規模は「賦糧二萬石」(『元史』卷六五河渠志澱山湖の條)にあたるという。同じく『元史』河渠志澱山湖の條によれば、元來澱山湖は水量調節の役割をはたしており宋代にはここに田をつくることを禁止していたが、圍田をつくり湖を狭くしてしまうと下流域に水害をもたらす結果になった。その疏治など湖の管理をめぐる世祖のときから議論があったが、決定的な對策をうちだすには至らなかった(ここに「疏治は曹總管の金を受くるに因りて止む」というが、曹總管とは曹夢炎あるいはその一族のものではないか)。樞密院官に意見を求められた朱清と張瑄は宋代の湖の管理の制度を述べ、范文虎は軍を屯せしめ萬戸に委してこれを統率すべきことを述べた。^⑨ これにより樞密院は都水巡防萬戸府を行院の監督のもとに發足させるべきことを建言した。^⑩ しかし成宗が即位すると行院は廢止されてしまうから、澱山湖の疏治の問題もまたのびのびになったことと思われる。藤野氏が指摘された如く『農田餘話』に曹夢炎と朱清・張瑄との對立關係が述べられているが、澱山湖の圍田はその下流域に勢力を有する朱・張の利害とあいられないものであったためと思われる。さきに一言したように曹夢炎は桑哥治

政の時、米萬石とひきかえに宣慰副使を遙授された。ところが曹夢炎はやがて没落する。『農田餘話』卷上には、

曹氏糧萬石宣授、遙授浙東道宣慰副使。有司以文字上增「歲獻」字、以是歲歲趣之、子孫爲凶家。厥後有司以湖田散佃于鄉民、以足其數。在前元元貞大德皇慶間事也。

とあり、これをそのままにうけとれば、元朝の收奪をささえきれず次第に一家は没落し、ついに残された湖田は官司の手によって經營されることになるのである。

しかし朱清・張瑄や曹夢炎以外にも松江において大地主として命脈をいまいしく長く保つものもいる。さきの『正徳松江府志』にみえる朱國珍・管明については『農田餘話』卷下に、

朱國珍・管明、居上海、家富豪橫、因刈荒蕩蒔草、啓爭端相殺傷、至使二境人不敢越界、……時在後至元中、丞相伯顔當國、戮二人于平江、并其黨與、籍其家。厥後田土撥賜丞相脫脫、立稻田提領所于松江、主其事。

とあり、豪民としてたがいに勢力をきそつた彼らは後至元年間に誅殺された。その田土の管理のため稻田提領所を立てたほどであるから、大土地所有者としてかなりのものであつたらう。しかし残念なことにその所有田土の規模は不明である。さらに瞿鏐發なるものがある。『山居新語』に、

松江下砂場瞿鏐發、嘗爲兩浙運使。延祐間、以松江府、撥屬嘉興路、括田定役榜示、其家出等上戶、有當役民田二千七百頃、并佃官田共及萬頃。浙西有田之家、無出其右者。此可爲多田翁矣。

とあり、彼の有する官民田は萬頃に上つたという。また『元史』卷一九二王良傳に、

(王良) 遷江浙行省檢校官。有詣中書訴松江富民包隱田土爲糧一百七十餘萬石、沙蕩爲鈔五百餘萬緡、宜立官府糾察、收追之。中書移行省、議遣官驗視、而松江獨當十九。良至松江、條陳曲折、以破其誣妄、言其不過欲竦朝廷之聽、而報宿怨、且冀創立衙門、爲微名爵計耳。……良言上、事遂寢。

とある。さきにあげた『正徳松江府志』にのせる王良の議案は實はこれに對應するものであつて、「中書に詣り松江の富

民の不正を訴えた」のは、議案中にみえる行省理問の徐璿及び潘文桂なるものである。それにしても包隠する田土が七十餘萬石にあたるというのはかなり大きな數値である。王良の議案には次のようにいう。

借曰富豪兼并、朱張則斷沒、曹夢炎田土、已皆入官、朱國珍・管明、又已全籍、其家餘無幾矣。其所言者、止有竈戶瞿時學等、虛包沙塗田糧、奉使宣撫所委官元問已招數內、天曆二年已撤佃造冊三千六十一頃七十六畝二分、收科糧二萬二千一百一十六石六斗二合外、有陳訴虛包八百五十餘頃、該糧八千五百餘石。

朱清・張瑄・曹夢炎・朱國珍・管明が誅殺されあるいは沒落したのちのこの時點（後至元五年）において、徐璿らが申し立てるところの不正をなした富民とは竈戶の瞿時學らであることがわかる。瞿時學がはたして前の瞿霆發の子孫にあたるものかどうかははっきりしないが、ここで訴えているのは田土八百五十餘頃、税糧にして八千五百餘石である。『元史』王良傳にいう一百七十餘萬石の二分の一にすぎず、天曆二年〔1329〕から後至元四年〔1338〕までの十年分としても二十分の一である。徐璿らの訴えは結局いれられず、かえって罪をうけるはめになるようである。その富民包隠の内容も適正でなかったであろうし、王良あるいは元朝政府の側では現實の大土地所有をこの場合つきくずす考えはなかったのである。その他寺田などの問題が残るが、それらの實態は今明らかにできない。以上のような大土地所有者と朱清・張瑄とその土地所有の規模において直接數量的に比較することは不可能であるにせよ、彼らがこれら大土地所有者と十分比肩しうるものであることは容易に納得されよう。また『大元海運記』卷上に、

本省先擬嘉興・松江歲科秋糧六十餘萬石、并江淮財賦府年辦稅糧一百餘萬石、江浙財賦府歲辦糧二十四萬餘石、照依時估、於係官錢內、先行提撥、卻將前項糧數、以充海運。

とあるから、朱・張の田土は嘉興路にも及んでいたかもしれない。要するに朱清・張瑄は松江府において大地主であったばかりでなく、さきに述べたように江南地方一帯に田土を有した點で實に巨大な地主勢力であったことに特色がみとめられよう。

四 朱清・張瑄の誅殺と財産官没の意義

朱清・張瑄の田土財産は中政院に沒收され、ト魯罕皇后がしりぞけられ武宗が即位してからも、その籍沒資産は中政院下の江浙等處財賦都總管府提舉司（略して江浙財賦府、杭州におく）が管理することになった。膨大でかつ廣域にわたる資産を管理するために、江浙財賦府の下に平江等處財賦提舉司・松江等處財賦提舉司・集慶（建康）等處財賦提舉司の三司が任務を分掌した。これらの提舉司は時としては朱張財賦提舉司と稱される。朱・張の沒收財産で太后關係の徽政院に屬したもののや功臣に與えられたものもあった。しかし彼らの財産がほとんど皇后關係の中政院に屬したことは、前述の大德七年前後の政治情勢と考えあわせればきわめて興味深く、皇后派の實力が經濟的にうらうちされていたことをも考えさせる。つまりこの籍沒は皇后を頂點とする政界の新勢力をささえるかぎとなったのではないか。その沒收財産の莫大さはさらに當時の財政環境の中での朱張籍沒事件の重大さを想像させる。『元史』卷一八成宗紀至元三十一年八月己丑の條に

詔、諸路平準交鈔庫所貯銀九十三萬六千九百五十兩、除留十九萬二千四百五十兩爲鈔母、餘悉運至京師。

とあるように、成宗即位のはじめに全國から銀のひきあべが行なわれた。また『元史』卷一九成宗紀大德二年二月丙子の條に、

帝諭中書省臣曰、每歲天下金銀鈔幣所入幾何、諸王駙馬賜與及一切營建所出幾何、其會計以聞。右丞相完澤言、歲入之數、金一萬九千兩、銀六萬兩、鈔三百六十萬錠、然猶不足於用、又於至元鈔本中、借二十萬錠。自今敢以節用爲請。帝嘉納焉、罷中外土木之役。

とあって、當時の財政の困窮の様子がうかがわれる。元代財政上大きな負擔となったものは軍事費と諸王への賜與であつたといわれるが、その際銀の地位はことに重要であつたと思われる。大德二年にしてすでに國庫が豊かでなかつたとすれば、以後の海都の亂による北邊の緊張に對處するための軍事費の増大（賜與の形をとる場合もあろう）は、大都政府にと

つて深刻な問題とならざるをえない。くわえて大徳四・五年の雲南八百媳婦遠征の失敗がある。また北邊が安定してきたからといってその軍隊への補給の必要がなくなるわけではなく、かえって戦争の終結の結果、論功行賞にともなう出費を強いられることにもなる。『元史』卷九三食貨志鈔法の條についてみれば、大都政府はそれでも大徳五年まではかなり至元鈔の發行額を抑えてきた。ところが大徳四年六十萬錠・五年五十萬錠のあとをうけて、六年には二百萬錠、七年には百五十萬錠と紙幣發行額は激増している。また前田直典氏が指摘されたように、『歷代名臣奏議』卷六七にみえる大徳七年の鄭介夫の上奏文に、

今物價日貴、鈔價日賤。往年物直中統一錢者、今直中統一貫。如至元鈔五厘與一分、買不成物、街市之間、無所用焉。

とあるように、紙幣インフレの傾向がみられる。インフレを抑制しつつ鈔發行額を増加するにはことに紙幣の信用を確保しなければならぬはずである。大都政府としてはそのための何らかの措置を講ずる必要があったであろう。大徳六年は朱清・張瑄の命運の窮まった年であつて、その財産の接收はただちには行なわれなかつたとしても、政府にとってはここに至つて多額の鈔を發行するにたえる財源（鈔本として）を確保しえたということになる。朱・張兩氏の金銀などの動産の評價については、「富既に國に埒し」（『草木子』卷三上）とか、「富王室に倍す」（『堅瓠六集』卷二へ朱張兩海運）とか、「盈滿を以て罪を得」（『至正崑山郡志』卷五人物〈茅氏〉）あるいは「貴富江南の望爲り」（『梧溪集』卷四下〈張孝子序〉）などの抽象的表現のほかには具體的な數字をみることができない。前田直典氏のいわれるように、大徳八年正月に民間での金銀賣買が許可されたとすれば、あるいは低落にむかう鈔の價値を金銀との兌換によって維持するなどの新しい經濟政策がうちだされたものかもしれない。その際朱・張の財が何らかの形でこれに寄與するかもしれない。もとよりこの籍沒事件をもつて中國史上の籍沒の事例に代表させて國家財政との關連を論ずることはできまいし、實際には大徳末年から紙幣インフレをみるのであるから、結果として朱・張の財が圓滑に活用されなかつたということもいえる。

う。とはいえ朱・張誅殺の時期が皇后を頂點とする新勢力が據る大都の政府にとって、政治的にも財政的にも重要な時期であつたことは確かであろう。

『歷代名臣奏議』卷六八に、鄭介夫は

如朱張二家、一睽死之盜賊耳。以言豪霸、則渠魁也。皆向來朝廷寵遇之太過、所以養成今日之餘殃。原其始然、抑之不早、遂至身遭顯戮、禍及宰臣。此眼前之轍跡也。

と、彼らは一命をゆるされて遂に豪霸に至つた盜賊の頭であり、もつとはやく抑えておけばこのような大事にはならなかつたであらうという。また『弘治太倉州志』卷一〇上の朱清花園の詩の一節に、

左丞事業豈平泉 巨盜根基類金谷

と、朱清のなりあがりぶりを唐李德裕、西晉石崇になぞらえている。まことに彼らは巨盜というにふさわしい急速な成長を示し、しかし抵抗を試みることなく元朝國家權力の前に屈した。至大三年〔1310〕朱・張兩家は復活され、籍沒された宅一區と田百頃を賜つたというが昔日の勢いはもはやなく、かつての屋敷の跡は朱張巷（蘇州）という地名にのこされる。その波瀾に満ちた生涯はさまざまに詩に歌われ、また京師に連行されたとき二人の子供を抱いたまま號泣して抵抗した朱虎の妻の茅氏は後には節婦として世上に顯彰される。朱清・張瑄は皇后一派の政治的意圖の犠牲となつたといえよう。しかもこれまで述べてきたように彼らが特殊權益を伴う大きな政治勢力として發展してきていたことが、元朝という王朝國家にとってその江南支配體制の上に大きな障害となつていたことも事實のようである。この籍沒によって宋代以來の鄉村支配體制を根底からくつがえすことはなかつたにしても、朱清や張瑄のような肥満した豪民を放置しておくことはなかつたのである。この意味で成宗の大徳六・七年〔1302・03〕という時期は、元朝の對江南積極政策の一時期として注目すべきではないかと思う。『元典章』二五戸部卷一一の趨避差役の條（大徳六年）、『通制條格』卷一六の撥賜田土還官の條（大徳七年）にみえる江南の官豪勢要の人とはあるいは朱清・張瑄を意識するもので、これらの斷例も朱・張籍沒

事件に關連するものかもしれない。具體的に深めることとして今後に期したい。

おわりに

南宋末海賊また鹽賊として江南の揚子江流域や沿海地域に活動した朱清・張瑄は、元軍の南下に遭ってこれに身を投じ、以後一貫して元朝に協力し、とくに初期の海運事業をほとんど獨占的に經營してきた。私ははじめに朱清・張瑄が誅殺されるに至る政治的背景を追及した。この籍沒事件がきっかけとなって、中央及び地方の宰相には卜魯罕皇后を頂點とする皇后派官僚が擡頭した。時に成宗の大德年間であつたが、實權はこれら皇后一派が掌握したのである。しかもこの政變のうらには海都の亂終息に伴う蒙古帝室の内紛がからんでおり、この形勢がやがて成宗の死によって顯然となつた皇后一派と武宗・仁宗との抗爭の布石をなした。朱清・張瑄の籍沒資産はほとんど全てが皇后の府の中政院の管轄するところとなつたのであり、北邊において不利であつた皇后は南方に地歩を固めようとして彼らの誅殺を企てたのではなからうか。ついで朱清・張瑄の實力の内容について検討し、海運・海外貿易などにおける實權と經濟力の大きさを推測し、さらにその實權の大きさが必然的に利害の衝突をまねく江南の行樞密院の廢止問題に言及した。成宗即位後の行院廢止は朱清・張瑄ら江南の行省官の壓力によってなしとげられたものである。彼らの有した財産のうち動産については具體的な實數を見出しえていないが、不動産とくにその所有の田土の規模はある程度明らかにできるので、大土地所有者としての朱清・張瑄の實力について述べた。彼らは松江府において「稅糧十餘萬石」にあたると評價されるほどの大地主であつたし、かつ江南の各地に田土を所有した。これらの田土も全て中政院に沒收された。また籍沒後に行なわれた吳松江の水利事業についてふれ、朱清・張瑄の利益を無視してはじめてなした事業であることを推察した。最後に朱・張の財の籍沒が行なわれた當時の財政環境を考え、皇后一派の擡頭したこの時期に皇后の府の中政院に沒官された朱・張の財が、何らかの財政的意義を有するのではないかと考えた。財政の困窮・紙幣インフレ傾向の情況の中で、紙幣發行額を大幅に増加した

り金銀私賣買許可を行なうにはかなりの財源が準備されねばなるまいから、朱清・張瑄の籍沒財産がこれに利用されあるいは利用することを意圖されたのではないかと想像した。要するに朱清・張瑄の勢力を剝奪したことは、皇后を頂點とする政界の新勢力をささえる力となった。と同時に彼らのような強大な南人が特殊權益を伴う政治勢力として發展してきていたことは、元朝の江南支配の障害となっていたはずであり、この點からみても朱清・張瑄の勢力の消長は元代史上の興味ある問題となるのではなからうか。

註

① 桑原隲藏『蒲壽庚の事蹟』一九三五八支那官吏の海外互市▽

愛宕松男『天妃考』(『滿蒙史論叢』第四・一九四三・所收)

藤野彪『朱清・張瑄について』(『愛媛大學歴史學紀要』第三輯・一九五四・所收)

星城夫『元代海運運營の實態』

(『歴史の研究』第七號・一九五九・所收)

②

『新元史』卷一八二には兩人の傳を立てている。また清代禮

親王は、『嘯亭雜錄』卷二において

朱清・張瑄、以隸卒之賤、受世祖知遇、以海艘濟運、及夫

末際、歲運至四百萬之多、使太倉陳陳相因、紅朽不可食、

亦有賴於元者。何以一旦致罪、乃至身首不保。後世亦未有

鳴其冤者何。

と、元朝を頼りどころとしていた彼らの誅殺の不當なことを論じている。

③

至元二十五年正月癸卯、同年十月庚午、同年十二月丁巳、至元二十六年六月辛巳、同年七月戊寅。

④

ドーソン『蒙古史』(岩波文庫版・下卷・一九三八)第三編

第三章に次のようにある。△支那官吏の海外互市▽

忽必烈は一二八九年(至元二六)七月上都を發して西方境上に向ひしに、敵兵を見ずして踵を返せり、蓋し海都は遠く去れるなりき。

⑤ 行泉府司の設立・廢止に關しては、村上正二「元朝に於ける

泉府司と幹脫」(『東方學報』東京第一三冊・一九四二・所收)に詳しい論述がある。

⑥

『金華黃先生文集』卷三四の徐泰亨の墓誌銘に、

民間以匪朱張財物、多無辜坐逮者。君(徐泰亨)力爲辨

析、免男女爲奴婢者若干人。

とあるようなゆきすぎさえ生じていた。

⑦

この記事は董士選傳には成宗即位の前にあり、桑原氏も『蒲壽庚の事蹟』の中でこれを世祖の末年のこととしているが、これは解しがたい。大德七年に董士選は江浙行省左丞に任じ

(中書左丞ではなく)徹里も同省平章政事に任じたのであるし、またこの記事と成宗即位の記事の間に董士選と徹里の水

利事業(後述)のことがみえるから、これは朱・張籍沒事件

に關連することまがいあるまい。なお『新元史』卷一四一

⑧ 董士選傳には聚斂之臣のことと水利のことを削除している。宰相年表を簡略にしたものを左に掲げる。

新體制		舊體制	
哈刺哈孫	右丞相	完澤	
阿忽台	左丞相	哈刺哈孫	
阿老瓦丁 木八剌沙	平章政事	赤渾薩里 賽典魯那 阿段梁暗	都刺
洪雙叔	右丞	八馬辛 楊炎龍	
尙文	左丞	月古不花 呂天麟	
朵解 董士珍	參知政事	迷火者 哈兒蠻 張斯立	

⑨ 「十三等例」については『元史』卷一七世祖紀至元二十九年三月丁未の條に、

中書省與御史臺共定贓罪十三等、枉法者五、不枉法者八、罪入死者以聞。制曰可。

とある。「十二章法」については、『元典章』四六刑部卷八の贓罪條例の條に、

大德七年三月十六日、欽奉聖旨、……若平章伯顔・暗都刺・右丞八都馬辛等、營私納賂、蒙蔽上下、以致政失其平、民受其弊。今已籍沒家資、投戍邊遠、明正其罪、是用更張、以清庶務、遣使巡行郡邑、問民疾苦、分別淑慝。以近年所定贓罪條例、互有輕重、特勅中書集議、酌古准今、爲十二章。

と、聖旨の中でこの法制定の契機となった朱・張の賄賂のことを述べている。『校定本元典章刑部』（岩村忍・田中謙二

校定・一九六四）の刑部卷八に、十三を十二と校している部分は訂正すべきである。

⑩ なお劉國傑も同じ大德七年に没し、『梧溪集』卷四下八題元

故參政張公（張文虎）畫像の一文に、

平章高霸都素壯公、聞其死太息曰、水無張朱、陸無劉二霸都、則我亦死矣。

とあるように、江浙行省平章政事の高興は三人の水陸の立役

者張瑄・朱清・劉國傑の死を惜しんでいる。劉國傑は溪洞蠻などの討平に活躍したのであった。

⑪ ドーソン『蒙古史』第三編第六章に「皇后卜魯罕は帖木兒の晩年に方りて大に威福を弄せり」という。

⑫ 『元史』卷一七六王壽傳に、

初（王）壽與臺臣奏、……近者阿忽台・伯顔・八都馬辛・阿里等專政、煽惑中禁、幾搖神器。君子小人已試之驗、較然如此。

と、皇后派官僚の専横が述べられている。なおこの疏は大德六年二月の後、大德九年の前にあり、『續資治通鑑』にはこれを六年二月に附し、『新元史』には大德十一年の後に附すが、阿里が江浙行省平章政事から中書平章政事に擢用されたのは大德八年九月であるから、この疏はそれ以後のものである。

⑬ 『元史』卷二〇成宗紀大德六年十月甲子の條に、

改浙東宣慰司、爲宣慰司都元帥府、徙治慶元、鎮遏海道。

とあり、また『延祐四明志』卷八城邑放上・公宇八浙東道都元帥府に、

浙東爲海右巨鎮、……大德六年十月、旨陞都元帥府。凡軍翼戍於東浙者咸隸焉。樹旄秉鉞、職高而權重、七年秋、移治古明州。明三垂際海、扶桑在其東、甌粵在其南、且控扼日本諸蕃。厥惟喉襟之地、聖天子臨軒冊命、常選用重臣、非御史耳目、則宰執股肱之寄。重其地則重其人也。

とあり、この役所の重要性が強調されている。さらに同志卷三職官放下八慶元市舶提舉司の條に、大德七年提舉慶元市舶使司を革めたというのは、おそらくは浙東宣慰司都元帥府の移治に關連するものであろう。

⑭ 穗積文雄『支那貨幣考』一九四四

藤野彪 前掲論文

前田直典「元代に於ける鈔の發行制度とその流通狀態」(『北亞細亞學報』第三輯・一九四四・所收)

岩村忍「元代における紙幣インフレーション——經濟史的研究——」(『東方學報』京都第三四冊・一九六四・所收)

⑮ この文のうち數字を次のように訂正すべきである。

至元二十四年括勘該四十五萬八千九百三十石有奇、比之凶宋舊額、增糧三萬六千一百一十石。

⑯ 投獻については、藤野彪前掲論文と周藤吉之「宋代の詭名寄産と元代漢人の投獻——佃戶制とも關連させて——」(『東

洋文化研究所紀要』第九冊・一九五五・所收、『唐宋社會經濟史研究』一九六五・所收) 參照

⑰ 長瀬守「元代における任仁發の水利學」(『中國水利史研究』第二號・一九六七・所收) 參照。

⑱ 曹夢炎の澱山湖における圍田の開發については、池田靜夫

⑲ 『江南文化開發史』、周藤吉之「宋代浙西地方の圍田の發展」(『東洋文化研究所紀要』第三九冊・一九六五・所收) 參照。原文の一部を次にかかげる。

於是樞府言、「嘗奏『澱山湖在宋時、設軍屯守、范殿帥・朱張輩、必知其故。擬與省官集議定稟奏。』有旨、從之。乃集樞府官及范殿帥等兵(共)議、朱張言、『宋時屯守河道、用手號軍、大處千人、小處不下三四百、隸巡檢司管領。』范殿帥言、『差夫四千、非動搖四十萬戶不可。若令五千軍屯守、就委萬戶一員提調、事或可行。』臣等亦以爲然、與都水巡防萬戶府職名、伸隸行院。」

⑳ 『洪武蘇州府志』卷八官字に「朱張財賦提舉司は閭橋の北に在り」という。

㉑ 『元史』卷二二武宗紀至大元年正月己巳の條に、紹興・台州・慶元・廣德・建康・鎮江六路饑死者甚衆、饑戶四十六萬有奇。戶月給米六斗。以沒入朱清・張瑄物貨隸徵政院者、露鈔三十萬錠賑之。

とあり、また『元史』卷二一成宗紀大德八年二月丙午の條に次のようにある。

㉒ 賜禿赤及塔刺海、以所籍朱清・張瑄田人六十頃。

前田直典「元朝時代に於ける紙幣の價值變動」(『歷史學研究』一二六號・一九四七・所收)

㉓ 前田直典「元代に於ける鈔の發行制度とその流通狀態」